

第9回カンボジアスタディツアーを通して

不二聖心女子学院高等学校 Meimi M.

私は2025年の7月27日から8月3日にかけて、第9回目となるカンボジアスタディツアーに参加させていただきました。このニュースレターでは、ポルポト政権下の出来事と、カンボジアでの教育、このスタディツアーを通して感じたことについてまとめさせていただきました。

○ポルポト政権下の大量虐殺について

カンボジアでの大量虐殺について学ぶために私たちは、ツールスレン大量虐殺博物館とキリングフィールドへ訪問させていただきました。2025年7月11日の第47回ユネスコ世界遺産委員会において、「カンボジア記憶遺産：抑圧の場から平和と省察の場へ」

(Cambodian Memorial Sites: From Centres of Repression to Places of Peace and Reflection) が世界遺産リストに登録された直後であったため、とても印象に残る訪問となりました。

○トゥール・スレン大量虐殺博物館

この場所は、ポルポト政権下において知識人や教師などが収容され、ひどい拷問を受けた場所です。元々は校舎として使われていた建物ですが、皮肉にも教育者・知識人を苦しめるために使われたのです。教室であった部屋の窓は、収容者の声が外部に聞こえないようにふさがれていました。また、一つ一つの教室にベッドと鎖が残されており、壁には犠牲者の写真が展示されていました。犠牲者の写真は、どれも彼らが受けている拷問がどれだけ残酷なのかを私たちに訴えているようなものばかりでした。知識を持ったり教育を受けたりすること自体が罪とされ、教師や学生が命を奪われた歴史を目の当たりにし、背筋が凍る思いがしました。教育の場であるはずの学校が、人々を苦しめる場所になってしまうことに、深い矛盾と悲しみを感じました。また、この悲惨な出来事がたった約50年前に起こったということにも衝撃を感じました。50年前という、私の両親が生まれた同時期に起こったと思うと、なんともいたたまれない気持ちになりました。たくさんの方が亡くなった中、生き残った方が十名程度しかいないという事実も知ることができました。博物館には私より若くして収容所のスタッフにされ、拷問をさせられていた少年・少女たちの写真も展示されており、小さいころからこのような現状を目の当たりにしていたら心がむしばまれてしまうのではないかと感じました。教育を受け、知識を持つことで敵とみなされ、命を奪われた人々。その事実は、普段「学ぶことができるのは当然」と思っていた自分にとって大きな衝撃でした。学びが人を救う力にもなれば、脅威として消される口実にもなる。その両面性を突きつけられ、教育の意味を改めて深く考えるきっかけになり

ました。



現地のガイドさんから残酷な事実を伺った



トゥール・スレンの様子

○キリングフィールド

次に訪れたチュンエクキリングフィールドはたくさんあるキリングフィールドと呼ばれる場所の一つです。数多くの人々が処刑され、その土の下に埋められました。

慰霊塔には数千人の頭蓋骨が納められており、ただ静かに佇むその姿が言葉以上の重みをもって私に迫ってきました。特に衝撃だったのは、「キリングツリー」と呼ばれる木でした。幼い子どもたちがこの木に打ち付けられて命を落としたと聞いたとき、胸が締めつけられるような思いがしました。土の中からは、いまもなお衣服の切れ端や骨片が発見されると聞き、「歴史は終わったものではなく、今もなおそこに残り続けている」のだと実感しました。また、「一人を殺害するのならその家族も全員連れてきて殺害する」という話も、初めて聞くような思想で、その思想によりさらにたくさんの罪のない犠牲者を生んだのではないかと考察します。

静まり返ったその場所に立つと、犠牲となった人々の声なき声が風に乗って聞こえてくるように思え、ただ手を合わせるしかありませんでした。私は、平和の大切さをただ知るのでなく、感じて語り継ぐことが自分に与えられた使命だと思いました。



慰霊塔の前で手を合わせてから見学を行った



今でも人骨が発見される

○カンボジアの教育支援について

本ツアーでは、シェムリアップにある寺子屋や現地ユネスコ協会事務所にも訪れる機会がありました。

寺子屋活動では、事前に準備した折り紙を使い、現地の子供たちに日本の文化を紹介しつつ楽しんでもらう活動を行ったり、授業風景を見学させていただいたり、子どもたちに混ざってカンボジア式の遊びを楽しんだりもしました。

寺子屋での授業は、様々な年齢層の子どもが「学ぶ喜び」を最大限に感じながら積極的に授業を受けている様子がとても印象的でした。教室は日本のように整っているわけではなく、机も椅子も十分ではありません。教科書やノートなどの教材も日本ユネスコ協会連盟の支援により一人ひとりに行き渡っていましたが、それだけではもちろん十分ではありません。また、子どもたちの服を見てみると、ズボンが破けているのを何度も縫い直した跡や汚れが見受けられました。それでも、子どもたちは楽しそうに授業を受け、先生の話に一生懸命耳を傾け、発言しようとしている姿が印象的でした。私は折り紙と一緒に折る活動に参加しました。カラフルな紙を渡すと、子どもたちは大喜びし、何度も「見て！」「できたよ！」と声をかけてくれました。その笑顔は純粹で、教育を受けられる喜びを全身で表しているように感じました。ある子は「勉強できることが一番の幸せ」と話してくれ、その言葉が心に深く残りました。

活動の終わりに、ある子どもが私の目を見て「また来てね、ありがとう」と言ってくれました。その言葉を聞いた瞬間、胸の奥が熱くなり、短い時間であっても心が繋がったことを強く感じました。また、多くの子どもたちが私に抱きついてくれました。栄養不足で細い体から伝わる体温はか弱さを感じさせる一方で、そのハグには大きな勇気と将来への希望が込められているように思えました。その小さな腕に込められた想いは、今も忘れられません。

一方で、貧困や家庭の事情から学校に通えない子どもが多い現実も知りました。そのために、完全無償である寺子屋が必須になってくるのです。子どもが働かなければ生活でき

ない家庭もあり、学びたいという気持ちがあっても叶わない状況があるのです。教育は人の可能性を広げるものであり、国の未来を築く力になるのに、その機会が奪われてしまう現実はこれから先、少しでも少なくしなければならないと感じます。



寺子屋の先生・子どもたちとの記念写真



子どもたちと折り紙で交流する様子

○本ツアーを通しての感想

今回のスタディツアーで学んだことは、単に歴史や教育の大切さだけではなく、そこには「自分はこれからどう生きるか」という問いが常につきまといました。

大量虐殺という悲惨な歴史を前にして、私は「二度と同じ過ちを繰り返さないために、何ができるのか」を考えました。そして、子どもたちの輝く瞳を見て、「教育には人を変え、未来をつくる力がある」ということを実感しました。

私は、平和は誰かが守ってくれるものではなく、一人ひとりが努力し続けて守るべきものだと思います。これからは、私たち若い世代が率先して平和について考え、何ができるか行動に移すことで、世界の平和がそこから少しずつチェーンのようにつながっていくのではないかと私は考えます。そして、教育を受ける意味は、自分のためだけでなく、誰かの未来を支えるためでもあるのだと学びました。

この経験を心に刻み、今後は日常の中でも平和や教育の大切さを意識し、自分にできることを行動に移していきたいです。そして、このツアーで学んだ「平和を願う気持ち」と「学ぶ喜びを分かち合う姿勢」「教育を受けられることのすばらしさ」を忘れずに将来 UNHCR で働くという夢に向かって生きていきたいと思います。